

改めていうまでもなく、宗教者であれ宗教学者であれ、およそ少しでも宗教に関心を抱く者にとって、その現代的状況への問いは、避けて通ることができないものの一つである。少し立入ってみると、この問いには実は二つの側面が含まれていることが分る。その一つは、そもそも現代社会において宗教がいかなる状態におかれているのかという、現状認識の問題であり、もう一つは宗教（あるいはむしろ宗教者）がそれにどう対処すべきかという、行動選択の問題である。一言で「現代における宗教」といわれる時、これら二つが切り離しがたく錯綜しているかにみえるが、事柄の性質からすれば、それら

宗教・科学・人間

——現代宗教論への若干の覚書——

田 丸 徳 善

はある程度まで別のものであり、分けて考える方がよいであろう。しかし、正しい行動選択がなされるためには、当然のことながら、第一の現状認識が適切であることが前提となる。誤った認識は、常にはないにしても、しばしば誤った評価や態度決定へみちびきやすいからである。現代における宗教というテーマが、こうした二重の課題を含んでいることを、まずもって確認しておくことにしよう。

こうした二重の意味での現代宗教の問題は、すでに内外の多くの人びとによって、さまざまな形で論じられてきた。例えば東洋哲学研究所が数年前に催した公開講演

シリーズ「現代社会と宗教」は、きわめて実り多い成果をもたらしたが、ここでは現代宗教の問題が、とくに社会状況との関連の中で、しかも世界的な視野で扱われている(柳川啓一編『現代社会と宗教』、一九七八年、東洋哲学研究所、参照)。今回、本誌にのせられた、何人かの著名な外国人の学者の寄稿をまじえた諸論考も、これに関連するテーマを扱ったものであり、ある意味では前回のシリーズを継承するものとみることができる。ただし、これらは必ずしも最初から明確なねらいをもった特集として企画されたわけではないので、すべてが同一の論点に向って収斂しているとはいえないことも事実である。

筆者に与えられた任務は、おそらくこれらの論考を相互に関連づけ、現代宗教についてのさまざまな視点からのアプローチを互いにかみ合わせるような、一つの共通な枠組をつくることだと思われる。だが、それを本格的に遂行するとなると、決して容易ではないし、かぎられた時間、能力、紙幅をもってしては、率直に言って不可能に近い。そこで、以下、現代宗教というテーマを考えるに際して、重要と思われるいくらかの論点について、筆

者なりの見方を断片的に書きつらね、責をふさぐことをお許しいただきたい。

* * *

現代における宗教というテーマを掲げる場合、まずはつきりしておかなくてはならないのは、その「現代」の意味する範囲である。英語では、現代は一応 *contemporary* と表現されることが多いが、また *modern* が現代をさすものとして用いられることも少なくない。ところが、この *modern* はまた「近代」あるいは「近世」と訳すべき時もあり、その境界が明瞭ではない。もちろん、現代というのは一つの時代区分にもとづく概念であるが、区分である以上、その基準がある筈である。もし現代がそれ以前と異なっているとしたら、その特色はどこに求められるのだろうか。これについて、前記の公開講演では、現代をほぼ一九六〇年代ごろから以後と規定し、その特徴をエネルギーに代って情報が中心となるという点にみているようである(柳川啓一、前掲書、八、二八頁など参照)。この見方が、その当時から唱えられるよ

うになった「脱工業化時代」(post-industrial age)の理論を下敷きにしていることは、多言するまでもなく明らかである。

このようにみてくると、現代をどう捉えるかということが、ただ単なる時代区分の問題につきるものではないことが分る。具体的な年代をどのように設定するにしても、それはもつと実質的な現代というものの性格についての、何らかの理解なくしては不可能だからである。この点について、これまで試みられてきた解釈は、はなはだ多様であるが、今かりにそれらを大別すれば、次のようになるであろう。すなわち、(一)、主として人間の生活様式の物質的・経済的基盤によって現代を特徴づけるもの、(二)、高度工業社会、技術文明、脱工業化社会、等々、(三)、主として人間の集団生活の形態や特質から現代を規定しようとするもの、(四)大衆社会、都市社会、管理社会、等。これらの分析が、よって立つ立場や方法の違いはあっても、それぞれに現代の一つの側面を言いあてていることは疑いない。しかしまた、現代というものの全体像が、これらの中のどれか一つのみで蔽いつくされると考

えるのも単純すぎるように思われる。社会学者の辻村明氏が、テクノロジーの発達程度と社会体制とを二つの座標軸として、現代社会を位置づけることを提案している(辻村明編『現代社会論』、一九七二年、東大出版会、五一―六頁参照)のも、その点からして示唆的だと言つてよい。

もつとも、辻村氏の立場はあくまでも社会学者としてのそれであるから、右の二つの座標軸だけでは、宗教のように複雑な対象を把握するには十分ではない。宗教を捉えようとすれば、どうしてもさらに(三)として、精神性、文化あるいは思想とでも呼ぶべき指標を設定しておく必要がある。ある意味では、この次元こそがまさに宗教の核心部分だとも言えるのであって、それ故にこそ、現代において超越的な価値の喪失とか人間疎外とか、宗教の危機として論じられるわけである。いずれにしても、現代における宗教の問題を考えるに際しては、ここにあげた多様な要因に注意を払う複眼的な思考が要求されるが、ここでさらに、しばしば見落とされがちなもう一つの点にも言及しておこう。それは端的に言えば、現代生活の地域差にかかわる。現代社会という時、われわ

れは恰もそれが自明であるかのように、日本をも含めたいわゆる高度工業国をさすのがふつうである。これは、主に右にあげた(一)、(二)の指標によると言つてよいであろうが、他方、少なくとも現在の時点で、地上に多くの後進社会があるということも否定できない事実である。その意味では、歴史の歩みは決して一様ではなく、跛行的であることを認めなくてはならない。

* * *

右に述べたように、一口に現代といつても、その内実は決して均一ではなく、換言すれば、同じ現代という場において、いわゆる現代的な状況と現代以前の生活形態とが並存していることは明らかである(ついでながら、こうした不均一性は、例えば都市圏と非都市圏との差といった身近な現象として、より小さな規模でもみることが出来る)。だからわれわれが現代を問題にする場合、実はごく一部にみられる特定の兆候を取りあげているにすぎないのである。たしかにそれらの現象は、新しく先端的であり、おそらくはやがて他の地域、社会にも波及

することが考えられる。およそ歴史における文化、文明の進展は、殆どがそのようにして起つてきたと言つてもよからう。なぜそのような不均一性が生じるのか、なぜある時代にもっとも特徴的な生活形態が、何れか特定の民族、社会においてとくに顕在化するのかは、ヘーゲルらしい歴史哲学の重要な問題の一つであり、その論議は一部、近年の比較文明的な考察にも受けつがれていゝる。ここでは、そうした点に深入りする暇はないが、当面の問題との関係で、少なくとも次の二つのことに注意しておきたい。

その一つは、いま指摘したと類似の不均一性が、宗教についても存しているという事実である。現代宗教というような表現を用いると、恰も宗教がすべて同一であるかのような錯覚をさそいやすが、これは明らかに現実とは合致しない。ちょうど現代の諸社会が多様であるように、宗教の世界もはなはだ多様性にとんでおり、しかもいろいろの意味においてそうなのである。いわゆる世界宗教についてみれば、ごく大まかに言つて、これまでのところ仏教は主に東アジアから南アジアにかけて、ま

たキリスト教は主にヨーロッパから西アメリカ大陸にかけて分布しており、これに対してイスラム教は、主に西北アフリカから南アジアにかけてその教勢を伸ばしてきた。しかし、実際には、それらは各々がさらに複雑に分化している上に、それ自身が現代の大きな特徴でもある高度の社会的流動性に助けられて、従来なかつたような規模で互いに会いつつある。さらに、こうした諸宗教の出会いには、単に世界宗教だけにはとどまらず、神道、ヒンドゥー教等々といった、より民族性のつよい宗教をもまき込む形で進行している。この過程がいかなる結果をもたらすかが、宗教の今後を規定する重要な要因の一つとなるであろうことは疑いない。

宗教の多様性という否定すべくもない現実、さらにもう一つの点でも、当面のテーマにふかい関連をもっている。端的に言えば、それは科学との関係という問題である。さきにわれわれは、現代を特徴づける指標の一つとして、高度に発達したテクノロジが考えられることにふれた。しかし、そうしたテクノロジは科学、とくに近代科学とは殆ど不可分のものである。しかも、一見

して明白なように、この近代科学(中でも自然科学)は、最近の教世紀をつうじて、ヨーロッパ(西欧)でまず形成され、後になって次第に他の社会に波及してきた。それがなぜヨーロッパで最初に生まれ、他の社会では生まれなかつたのかということも、すでに何人かの論者によって取り上げられた重要かつ興味ふかいテーマに属する。ただ、ここでは、それについて詳論することはできないので、次の点だけに言及しておこう。すなわち、近代科学がヨーロッパで最初に成立したことから、ヨーロッパ的な宗教としてのキリスト教は、科学と最もふかかかわることになった。この交渉は対決、妥協、修正といったさまざまな結果をもたらしたし、また決して完結したわけでもない。たしかに他の諸宗教も、それぞれ何らかの形で科学とかかわってはきたが、キリスト教の場合に比べれば、それはまだ表面的と言わざるを得ないであろう。この宗教と科学の交渉の行方もまた、現代における宗教のあり方を規定する重要な要因と言わなければならない。

* * *

ここまでみてくると、現代の宗教状況にとって、科学との関係が一つの焦点をなすことは明らかである。事実、それはすでに多くの人びとから指摘されてきたことでもある。例えば、現代における宗教の役割を執拗に追求してきた西谷啓治氏は、宗教のあり方にとって決定的な意味をもつのが科学とのかかわりであることを、繰返し強調されている（『宗教とは何か』一九六一年、創文社、五三頁以下参照）。しかし、それは具体的にはどういう意味においてなのであるか。このことをさぐるためには、宗教と科学とのそれぞれについて、その本質的特徴を把握するとともに、現代にいたるまでの両者の展開の歴史的な様相をも跡づける必要がある。言うまでもなく、これは本稿で取りあげるには手に余る難問である。それ故、ここでは取り敢えず、ごく基本的と思われることのみを述べることにする。

第一の問題は、科学とは何かである。これに対しては、いろいろの角度からの答えが可能であり、今までも

実際に提示されてきた。またその答えは、どのような分野、つまり自然科学、社会科学、人文科学の中のどれに主眼を置くかでも、当然に異なってくる。しかし、そのことを敢えて度外視して言えば、科学には二つの方向性が含まれているとみてよからう。科学とは総じて経験と思考ともとづく知識の体系であるが、それは一方で、人間の環境（自己自身も対象である限りそこに含まれる）に対する理性的な統御という目的と結びつき、かつそれを可能にする。この点からすれば、それは広い意味でのテクノロジーと不可分のものであり、その萌芽はかなり未開の段階にまで遡る。かつてマリノフスキーが科学の「最小限定義」として、「経験にもとづき、そこから論理的に帰納され、物的な成果として伝えられる一群の規則や概念」と言ったのは、このことを指したものである（B. Malinowski, *Magic, Science and Religion*, 1954, Anchor Book, p. 35）。しかしながら、これはあくまでも科学の一面にすぎず、科学には他方で、実際の応用から（そして時には経験そのものからさえも）離れて一般化し、抽象化する傾向が含まれている。いわば科学が

純粹に理論的なものとして分化してくるのである。前者がテクノロジーとしての科学であるとすれば、この後者は、理論あるいは世界観としての科学とも名づけられるかも知れない。そして、いま問題としている近代科学にもまた、この二つの側面が複雑な形で含まれているのである。

それでは、もう一つの焦点をなすところの宗教は、どのように捉えられるだろうか。この問いに対する解答は、科学についてよりはるかに難しい。宗教を専門的に研究する宗教学ないし宗教哲学においてさえ、なかなか見解の一致が達成されず、いわゆる定義問題がたえず新しく繰返されているのは、この困難さの故であり、その原因の大半は、宗教というものの複雑さにあるといっても過言ではない。前述のごとく、科学はテクノロジーとの結合という側面からして、きわめて身近な実際の目的と直接的に結びつき易い。しかし宗教は必ずしもそうではない。例えば食糧の獲得、あるいは病気や災厄の除去といった、ごくありふれた日常的な願望をとってみよう。科学はそれを、その事象の因果的連関についての知

識にもとづいて技術的に達成しようとし、呪術もまたある種の技法に訴えるのであるが、宗教は祈りや何らかの修行などの間接的な道をとるのがふつうである。科学は、たといその内容がいかに異なっているにしても、一般に知識の体系として性格づけることができ、その限り、知的な作用の一形態にとどまる。これに対し、宗教はただ単にそれだけではなく、さらに情緒や意志の領域に属する部分があるかに大きい。換言すれば、宗教はこれら知的、情緒的、意志的といった諸要因を含む全人的なものである。それは感情を喚起し、表出させることをつうじて、情緒生活の安定や充足に寄与するとともに、また個人や集団の行為を規制するという作用をも果たしている。さまざまな宗教を構成する信念体系や儀礼は、こうした機能を果たすための道具立てと語りこともできるであろう。しかも重要なことは、少なくとも実際に信じられている宗教については、これら諸機能は別々のものではなくて、渾然一体をなしているという点である。感情表出的な機能は芸術に、行為規制の機能は道徳に通ずるとみることが、もちろん可能では

あるが、それはあくまでも後からの分析にすぎない。

もし宗教と科学とについての以上のような把握が、ある程度まで正しいとするならば、それは同時に、競合と共存という二様の意味での両者のかかわりを考えるための手がかりをも与えてくれることになる。この問題について、筆者はすでに多小論じたことがあるので（『仏教と科学』、『理想』、四五八号、一九七一年、二六一—三五頁および『宗教と科学』、『神世紀』、第五号、一九八三年、六五—七九頁参照）、ここではとくに現代にとって重要と思われる一、二の点のみにふれておくことにする。

われわれはさきに、科学との交渉が現代における宗教にとって中心的な重要性をもつであろうことを述べた。より具体的に言えば、この交渉は少なくとも二つの領域にわたるもののように思われる。その一つは、前述のテクノロジーとしての科学と宗教的な行動様式との接点をなす領域である。今日のわれわれの生活にはTV、コンピュータ等々、科学的な文明の利器があふれており、それらはいろいろな形の宗教と少しも矛盾せずに共存している。しかし、例えばひとたび生命の危機に際して、

医療技術に期待するか、ただ奇蹟を信じてひたすら祈る

べきかといった問題に直面すると、科学と宗教との共存は必ずしも可能ではなくなってくる。近年、めざましい発展をとげた生命科学に関しても、それが生命の操作に应用される場合には、類似の問題が生じることになる（野田春彦ほか『生命科学と宗教 II 生命操作と人間』、一九八二年、佼成出版社などを参照）。とくにこの後者のような場合には、宗教と結びついた倫理的な価値体系がテクノロジーの本質的特徴をなす統御的な態度と衝突しているといつてよく、それはすでに部分的に第二の領域、すなわち広義での科学的な世界観と宗教的信念との交差する領域に属するのである。およそいかなる宗教も、何らかの形で世界観（それは多くは神話的ないし象徴的な言語で語られるのであるが）を含まないものはないから、その点からしても、両者の交渉は不可避である。問題はただ、それがいかなる形をとり、どのような解決へみちびくかにかかってくると言つてよい。

* * *

さきに掲げたような見方をとるならば、科学はかならずしも近代の独創とは言えない。その起原は古代をもこえて、未開の社会にまで遡ることもできる。しかし、いわゆる近代科学が、その徹底した機械論的な思考の故に、それ以前の科学とかなり大きな相違を示すことは事実であり、しかもこの近代科学はヨーロッパで最初に成立したものである。宗教と科学との交渉がそこにおいて最も長い歴史を有するのは、こうした偶然の事情によるのであって、その歴史からはまた、この交渉を規定するいくつかの基本的な要因を読みとることができる。別の機会に述べたように（前掲拙稿「宗教と科学」、七七一—八頁参照）、このかかわりは対立、相補、一致という三つの基本的パラダイムに整理することが可能であるが、それらはただ単に並列したものではなしに、互いに浸透しあうダイナミックな過程として捉えるべきものと思われる。最後にこの点を少しばかり敷衍して、結びにかえることにしたい。

周知のごとく、ヨーロッパにおける近代科学の歴史は、ある意味で、伝統的宗教としてのキリスト教との対

立の歴史であった。その詳しい経緯は、例えばホワイトの古典的な叙述が示しているとおりであって、今さら繰返すまでもなからう（A. D. White, *A History of Warfare of Science with Theology in Christendom*, 1896）。その対立は、何れかといえば上記の第二の領域、すなわち世界観の領域にかかわるものであったが、まさにその理由で、実は宗教と科学との対立ではなかった、とみなすことも可能である。ホワイト自身がすでに、その書の末尾で、彼が叙述したのは科学と宗教との闘争ではなく、むしろ神学的下グマとの闘争にすぎなかったと明言している。これはすでに相補論（平行論）の視点に近づいたものにほかならない。この立場からすれば、そもそも対立が生じるのは、宗教的信念が誤って科学的陳述と同一次元のものとされ、認知的な性格を付与されることからくるのである。しかし、宗教は認知的というよりはむしろ実践的（情緒・意志的）なものであり、そのことが承認されるならば、かかる無用の混乱は生じる余地がない、ということになる。

こうした相補論の視点は、一方で科学の厳密さを保持

しつつ、他方で宗教の独自性をも保障することを可能とするものであり、その点で大きなメリットを有することは明らかである。詳しくみれば、この立場の中にもさらにいくつかの微妙な差異が見られるのであるが、それはしばらく考慮の外におくことにしよう。何れにしても、この見地は右のような利点をもつ反面、重大な弱みをかかえている。それは、この立場では認知的作用（科学）と非認知的作用（宗教）との有機的な連関が失われ、人間が二つの異質な部分に分解しかねないことである。しかし、もともと科学は科学する人間を離れてあるのではなく、宗教もまた人間の営為である以上、両者はどこかで一致するのだからならぬ。この点できわめて興味ふかいは、近年の科学哲学がかつての素朴実証主義をこえ、宗教的ないし神話的言語や世界観と科学的なそれとの類似を認める傾向を示していることである（E. R. MacCormac, *Metaphor and Myth in Science and Religion*, 1976; S. Toulmin, *The Return to Cosmology. Post-modern Science and the Theology of Nature*, 1982 etc.）。

このように、かつて対立するとされた科学と宗教と

は、相補をへてふたたび一致へ向いつつあるかのごとくみえる。しかし、これをもってすべての矛盾が解消したかのごとく考えたとすれば、これまた余りに樂觀的すぎることになる。というのは、さきに述べたように、古い対立は解消したとしても、テクノロジーの進展につれて、新しい葛藤の領域が生じてきているからである。そうした現代において要請されるのは、おそらく不断に対立、相補、一致の様相を示す宗教と科学とを、ともに人間の存在という原点に立ち戻って捉えなおすことではなからうか。

（たまきのりよし・東京大学教授）